資料6

会長スピーチの心得

ロータリアンは、誰もが仕事で忙しい中、時間を自己管理できる経営者であるからこそ、仕事をやりくりして例会に出席しています。それは、食事のためではなく、例会に身を置きたいと思う『何か』があるからです。だからこそクラブ会長は、その『何か』について、きちんと提供しているという認識と自負を持ち、毎回の例会が価値あるものとなるよう心がけなければなりません。

その例会の中で、会長自身に全責任があるもの（会長の専権事項）は、言うまでもなく「会長スピーチ（会長挨拶、会長の時間）」です。

「会長スピーチ」には、そのクラブの伝統や慣習のせいもあって、クラブ独自の傾向や雰囲気があるように思います。しかし、山形県内の各クラブを訪問すると分かることですが、どのクラブの「会長スピーチ」にしても、クラブの独自性だけではなく、やはり全体としては山形県らしい傾向や雰囲気もあるように感じています。それだけに、県外のクラブを訪問すると、「会長スピーチ」の内容が山形県内のクラブとはかなり違うことに驚かされるのです。

もちろん、県内各クラブの「会長スピーチ」が良いとか悪いとかを言いたいのではありません。温かみと慎みがあって、出過ぎたことは言わない。それでいて語るべきことは語るという山形県人らしい「会長スピーチ」は、個人的には大好きです。

しかし、「会長スピーチ」の効用という点では、山形県の場合は少し物足りなさを感じることがあります。クラブの会員の士気を高めるため、そして会長に対する信頼と敬愛の念を会員の心へ醸成していくため、さらにクラブの活性化をもたらすために最大の武器となるのは、何と言っても「会長スピーチ」だからです。せっかくの機会なのですから、そうしたクラブ会長の心意気が大いに感じられるよう、あと少しの工夫と配慮があってもよいように思うのです。

以下、「会長スピーチ」の心得とでも言うべきことについて、列挙いたします。

① クラブ会長の人柄（特に誠実さと責任感と熱意）こそ、会員の頑張りやクラブ活性化に最も繋がるものであり、そのための最大の武器は会長スピーチであることを銘記する。

② 会長スピーチは、「ロータリー情報を交えながら、感動的で役に立つ話」を心がけ、毎回、会員が 「来てよかった、心が洗われた」 と思えるような内容を心がける。

③ スピーチの原稿は、1分300字を目安とする。文と文を繋ぐ接続語を上手に使い、「起承転結」または「序破急」の組み立てを原則とする。

④ スピーチは、声の大きさ、スピード、抑揚、喋りの間（ま）、視線や表情、身振り手振りなどによって伝わり方が大きく異なるので、毎回、それらに留意した練習を心がける。

下記３人のクラブ会長時代の「会長スピーチ集」を掲載いたします。地区も異なれば、人柄や考え方も異なる３人ですから、スピーチの内容もかなり違います。参考になれば幸甚です。

１．鈴木一作（2009-10 寒河江ＲＣ会長 ）：2800 地区パストガバナー
２．坂東隆弘（2016-17 柏原ＲＣ会長）：2680 地区青少年奉仕委員長
３．成川守彦（2017-18 有田ＲＣ会長（2 度目の会長））：2640 地区パストガバナー

（年度順、敬称略）